

Title	巻頭言 現実主義の必要を思う
Author(s)	高橋, 義文
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.2 : 1-1
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=3145
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

現実主義の必要を思う

このところ〔原稿を書いている7月はじめ〕、菅政権の末期的症状がかまびすしく伝えられている。そうした情報に接しながら、ふと、この政権が誕生した一年余り前、菅直人首相が現実主義者（リアリスト）であることを、メディアがおおむね好意的に報じていたことを思い出した。それは、実現可能性を示しえないままに夢を語った鳩山前首相への失望の反動でもあったであろう。

ところが、いま、現実主義（リアリズム）にふれる議論はほとんどみられない。それどころか、振り子は反対方向に大きく振れ、ヴィジョンや国家観や将来像の必要を訴える声がしきりである。危機のなかで迷走を続けるかに見える「現実主義者」菅首相への不信のせいであろうか。

しかし、現実的思考を無視してヴィジョンを語ることは必ずしも好ましいことではない。場合によっては「あれか、これか」を迫る極端な思想も生じかねないからである。事実、そのような現象がかなり見られるようになってはいまいか。それゆえ、このようなときに、いや、このようなときだからこそ、あえて、現実主義と現実主義的な見方とその意義についてあらためて考えてみる必要もあるのではないだろうか。

現実主義とりわけ政治的現実主義には長い歴史があるが、ここでは、第二次世界大戦後しばらくの時期のアメリカにおいて一定の歴史的役割を果たした現実主義に目を止めてみよう。それは、外交政策をめぐるG・ケナン（外交官）、H・モーゲンソー（政治学者）、D・アチスン（政治家）、W・リップマン（ジャーナリスト）、R・ニーバー（神学者）らの思想と活動である。世代を同じくするこれらの人々は、考え方においてときに決定的とも言えるほどの違いを見せながらも、それぞれの見解の濃淡を深く交流させて、この時期、「^{コヒアレント}一貫したまとまりとしての現実主義」（J. H. Rosenthal, *Righteous Realists*, 1991）を形成し、現実の政治に、あるときは背後の思惟として、あるときは厳しい批判や具体的政策提言をもって多大な影響を与えた。そしてそれは当時の世論の一定の支持を得たのである。

そうした現実主義を、ニーバーは、「^{ディスポジション}確立されている規範に抵抗するすべての要素とりわけ利己心と権力の要素を考慮に入れる傾向」向」（“Augustine’s Political Realism,” 1953）と定義した。形而上学的に厳密な表現ではなく、人間の経験と社会の現実^{ディスポジション}に即した、人間自己の罪性への深い洞察を前提としたものである。この見方は他の現実主義者たちにも共通し、アメリカの伝統に内在する楽観主義的人間観を徹底して排する姿勢ともなった。もっとも、この姿勢が、現実埋没、status quo、悲観主義に傾斜しがちであることは言うまでもない。実際、かれらにそのような批判が向けられることも少なくなかった。

それゆえニーバーは、人間には同時にもう一つの側面すなわち創造的側面があることも強調した。人間は、破壊性と創造性の弁証法のなかにあるのである。しかしそれだけではない。ニーバーには、その人間の営みを外からとらえる究極的超越的視点を保持するというもう一つの次元があった。それは、モーゲンソーがニーバーに学んだ、「永遠の相」からアメリカを見る視点である。この超越的な視点こそ、かれらの現実主義を、暴走や墮落からまもり、より高い次元へと牽引し、成熟した姿に鍛え上げる重要な手立てとなったのである。

この見方は、他の現実主義者たちにおいても何らかの形で共有され、そのゆえに、かれらの現実主義が、現実主義がしばしば行き着く、「パワー・ポリティクス」への信奉に安易に結びつくことはなかった。むしろ、それを「レスポンシブル・パワー」の形態へと改変することに向かったのである。

大震災や原発事故のみならず山積する内外の諸問題を前に、極端に言えば、なすすべを知らず立ちつくしているかにさえ見えるこの国にあって、いま必要なのは、ケナンらに例を見る、成熟した深みのある現実主義的思考ではないだろうか。そしてそれは、そこに生きるわれわれ個人についても同様ではないかと思う。